

【緑地を楽しむ本】

『大津波のあとの生きものたち』

写真・文 永幡喜之 少年写真新聞社



東北大震災とその後
の原発事故から10年、今もまだその爪痕に傷つけられている方々に心からのお見舞

いを申し上げます。メディアも「忘れまい」とこぞって取り上げています。ただ、それも人や生活についてだけで、あのとき海の藻屑と消えただろう生きものたちについて思い出す人はほとんどいません。

著者は津波の直後から海岸を、生きものたちを探して歩きました。意外なことに、2年後には自然は立ち直り、人の手が加えられなくなったことでむしろ見られなくなっていた花々も咲き誇るよ

うになってきたのです。自然の力強さを感じさせてくれます。

でも、復興という名の開発が再開されると、せっかく大津波をくぐりぬけてきた頑張っていた生きものたちも、あっという間にいなくなってしまう。それは何故？

これは福島だけのことではありません。今は日本中が自粛という不自由に耐えています。コロナが終わった後、コロナを征服した！というおごりに満ちた人々が、どんな社会を作っていくか・・・

「自然環境をどのように未来へと残してゆくべきか、一人一人が考えなくてはならない時代です」永幡さんからのメッセージを私たちは重く受け止めなくてはなりません。

(小川)